

# 史料報

第 52 号  
平成 2 年 3 月

## 御先祖様の呼び起し

佐藤 友之

(日本たばこ産業株式会社  
専務取締役・原料本部長)

十年前のある日、国文学研究資料館の若き学徒、安藤正人氏の思いがけない訪問を受けた。史料館に保存されている当家の古文書の整理を、またま担当され、調査中に現地の町役場を通じ、その家系の所在をつきとめたとのことであった。父が高齢のため小生がお相手を務めることになったが、東京で生まれ育ち現世の波風に追われている末裔ともなれば、名家ではない先祖の残した古文書などには、今さらの感を抱くのが一般であろう。しかし、私には感慨深いものがあった。

私の学生時代迄は、父の郷里に祖父母が健在であった。いわゆる田舎のおじいちゃん・おばあちゃんである。母方が東京在住であり、都会育

ちの軟弱浮薄な気分にかたよらないようにとの父の配慮もあってか、学校休みの都度、祖父母の許に帰された。当家の嫡男としての自覚を植え付ける意図も込められていたのだろう。孫の到来とばかり歓待してくれし、それに戦中戦後の東京は食糧難で、喰い盛りの年頃としては、越後の白い飯にありつけるのが楽しみであった。吹雪の夜に炉端で焚火のはじける音と共に、祖父母が孫の私にいろいろ語ってくれた話題の中に、御先祖様の由来があった。子供が興味をそそられる話ではないが、一緒に出される甘酒や飴湯の手前、目にしみる煙を払いのけながら我慢して聞いたものである。

祖父は分家の長男であったが本家

### 目次

御先祖様の呼び起し……佐藤 友之(1)	平成元年度史料所在調査報告……(6)
商家経営における収集情報記録化……安澤 秀一(4)	平成元年度新収史料紹介……(8)
真田家文書目録(その五)の整理を終えて……原島 陽一(5)	受贈図書……(10)
	集報……(13)

の養子に迎えられ、大正の初め、裁判所の判事の職に就いていたところ、養父の死去に伴い若くして退官帰郷してしまつた。養子の立場上止むをえなかつたのだろうか、いささか仕事に厭気がさしていたようでもある。雪国の寒村の小地主の跡取りに引込んでしまつたのは惜しい気がするが、五斗米を投げ打って郷に帰るとは、漢詩の世界をゆく結構な御時世と身分であった。しかし、戦後の財産税と農地解放により、その五斗米にもこと欠く様になつてしまつた。古文書を格納してある書蔵には人を入れず、湿気の少ない晴天の日には、窓の開閉を自ら行つていた。また、和紙で綴つた冊子に毛筆で、地主経営や家政の事績を毎日克明に記録している姿を今でも思い出す。養子の身に、司法官出身の几帳面さが重なつて忠実に家督を相続していたのがしのばれる。

一方、祖母もまた養女であつた。

幼くして縁戚から入籍して育てられたので、遊学で不在の養子の祖父よりも、家つきの跡取り的な気概が強く、しつかり者の御寮人さんであつた。よその地主や旧家に対抗意識が強く、他家の祝いの振舞の程度が気になるタイプである。わが家は歴代庄屋を務めてきたのみか、ある代には大肝煎に任命されたとか、儒者が輩出したので相当の漢籍が蔵に残っているなどの自慢話を幾度となく聞かせられた。だからお前様も当家の跡継ぎとして、もっと勉強し、おえら方になれと言っているようで、祖母の特権意識にいささか反感を抱いた記憶がある。特に戦後、旧秩序の瓦解と民主化の嵐の中で学生生活を送つた生意気盛りの頃には、小さな家柄へのこだわりと地主の寄生的存在をめぐって、祖母に対して非難まですした。幼い養女から六十年以上にわたつて、耐え忍びながら家を守つてきた祖母にとって、没落の過程で

孫にまで反発されたのは悲しい思いであつたろう。ただ、今でも忘れな  
いのは、戦時中、中学生であつた私  
に對し、大人になつたら紳士になれ  
と祖母が言つたことである。当時は、  
末は大臣、大將かはたまた博士かの  
時代であつたので、紳士服を着る人  
即ち勤め人になるぐらいいしか受け  
取つていなかったが、戦後になると  
ゼントルマンシップが提唱され、な  
かなか含蓄のある教えであつたな  
今になつて感心しなつかしく思つて  
いる。祖母は村の小学校を卒業した  
だけであつたが、読み書きにはうる  
さかつた。私が東京へ戻る時礼状を  
寄こすのを命じ、誤字脱字があると  
訂正箇所を指摘して返事をくれたも  
のである。

明治時代の裁判官の頑固さが災し  
て、祖父は戦後の激変に対応できず、  
没落の流れに孤高を保つのみであつ  
た。七十才余の生涯を閉じたのは、  
農地改革がほぼ決着をみた頃である。  
村はずれの川端にある露天の石畳だ  
けの火葬場で、一日がかりで茶毘に  
付される坐棺から立ち昇る煙を、祖  
父の位牌を持って見送つたのが、私  
にとって、先祖代々の地との事実上  
の別れとなつた。

祖父の死後二、三年を経て、祖母

は東京の父の許に身を寄せると同時  
に、郷里の家屋敷は母屋を残して取  
り壊し売り払われた。三百年続いた  
旧家の割には至つて粗末な家屋であ  
つたが、父の事業の不振と重なつて、  
それさえも維持に困難をきたしてい  
た。書藏も解体され、藏置されてい  
た漢籍と古文書の大部分は神田の古  
書店に売却された。おそらく漢籍の  
一部に稀覯本に類する物があつた、そ  
れを目当てに一式が引取られたに違  
いない。古文書の方は一括して史料  
館に転売されたわけなのだろう。

その後私は各地を転動する身とな  
り、ほぼ二十五年間は殆ど父の郷里  
に疎遠となつた。古文書などは、焼  
却されたかせめて再生紙に利用され  
たぐらひに思い全く忘れ去つていた  
ところである。史料館の安藤氏のお  
話を聞いて、驚き入つた次第である。  
私は一時期、技術部門の研究開発  
に携わつたことがある。先ず文献調  
査から始まるので、科学技術の文献  
はどのように整備されているか心得  
ていた。人文科学の分野では、歴史  
的に重要な古文書は図書館や研究室  
に保存され、また公文書については、  
ほとぼりがさめて無難なものが逐年  
公開されることは分かつていたが、  
当家の古文書のようにありふれた村

方の資料などが一貫して保存されて  
いるとは知らなかつた。失礼ながら、  
国文学研究資料館史料館の存在を初  
めて伺つた始末である。

早速、史料館を見せていただくこ  
とになつた。反故の山の様な文書の  
束を丹念に一枚ずつほぐし、和紙に  
しるされたくせのある墨跡を判読し  
ながら分類整理されておられる研究  
者の姿を拝見した。

かつて当家に大事に保管されてい  
たとはいえ、専有死蔵されていた一  
万点を越す膨大な文書群が分類整理  
されてその目録が刊行された。一片  
一葉の各文書がていねいに分けられ  
る。それも大きな体系の中の各分類  
項目に挿入され埋没してゆくのでは  
なく、出所原則に基づいて、当家の  
文書として一括してある。しかも、  
私の先祖が実用の便を考えて整理し  
て格納していた元の配列を出来るだ  
け崩さないように整えて、再び保存  
されている。おかげで、「越後国頸  
城郡岩手村佐藤家文書目録」と表題  
を付けていただいてある。国の所有  
に帰したものに所名が永久に記さ  
れるのは、喜ばしい限りであり名譽  
を感じる。尤も、中には苛斂誅求を  
極めた非情の記録も入っているのか  
も知れない。一門の恥をさらすよう

な書簡もあろう。前世の怨念が現れ  
たり、御先祖様の叱声が聞こえてく  
る心配だつてある。しかし、三百年  
の家系の流れの中で、盛衰、善悪、  
毀譽褒貶、憎悪、いがみ合いの人間  
模様が織りなされるのは当然だ。事  
実は事実としてさらけ出し、各時代  
に悩み苦しむ時には喜び楽しみなが  
ら子孫の繁栄を願つてきた先祖の遺  
蹟を素直にしひたい。

史料館の地下書庫でわが家の古文  
書と四半世紀ぶりに対面した。虫喰  
いの穴もある丈夫な和紙に墨痕鮮か  
に記されているが、楷書の当用漢字  
を除くと、達筆の文字を全く読めな  
いのが残念であつた。明治以降の封  
書の中に、切手の貼つてある部分だ  
けが無残にも剥がされているのを散  
見した。それは私の仕業なのである。  
私が旧制の高校生になると、書藏  
に入るのを祖父は許してくれた。外  
観は白壁の土蔵であるが、内側は五  
寸以上の角材が一定の間隔を保つて  
林立するように張つてある。校倉の  
原理なのだろう。一人前に認められ  
た嬉しさと禁断の秘境に入る感動を  
覚えながら、祖父がねずみをいれな  
いよう扉を直ちに閉めるとか、戸窓  
の扱い方を注意するのを緊張して聞  
いた。土用の日差しでも涼しい蔵の

中で、棚の上や簞笥と木箱の中に文書が静かに眠っている。明り窓の格子の影の下で、明治の雑誌をめくったり、たまたま潜んでいた性典に目をこらしたものだ。当時、切手を収集する趣味があったので、明治初期の木版による和紙の郵便切手を発見したときは、昆虫採取で大きな揚羽蝶を捕えた場合と同じ胸の高まりを感じた。

安藤氏が現地の参考調査をされる際に、御案内したところ、雑物が入れてある残りの蔵の中に、まだ古文書がかなり置いてあるのを見出した。太閤検地に近い台帳が出てきた。また、既に史料館の所蔵になっている一連の文書の中で欠落している部分に該当するものもあった。大部分は明治以降の文書で、生々しい書簡もあったが、すべてを史料館に寄贈することにした。いや私には、それらを持ちこたえる力はないので、引取っていただいたと言った方が適切である。それに、大肝煎や庄屋というもの、個々の地主経営だけでなく、幕藩時代には代官の下で行政的な機能の一部を託されていたのだから、単なる個人の家政の文書ではなく公の性格も有ると思う。わが国では、江戸時代の寺子屋教育により識字率

が高く、和紙に墨の、保存に耐える文書であったから、徳川三百年の太平の時代も加わって、このような村方の文書は各所に存在するのだろうか。安藤氏が言われるには、当家の文書群は散逸が少なく一貫して保存されているとのことであり、営々として保管してきた先祖の努力に敬服の念を抱いた。

ついでに、面白いものを見つけた。私の臍の緒と産毛が和紙にくるんで保存されているのであった。こんなもの迄大事にしてくれていたのかと、わが子に対面した気になった。これは史料館になじまないもので、小生が保管している。

土地の賃借を仲立ちとする地主小作の關係以外に庄屋、大肝煎の存在が、水田農業と相まって村落共同体として村人を縛りつけ、因習と越え難い身分を形づくってしまったのであろう。戦前の農政で、農地解放が心ある為政者の悲願であったが、奇しくも敗戦によって占領軍によってなし遂げられた。(明治維新を始めとして現在の日米構造協議に至る迄、どうもわが国では内なる改革は難しく、外圧の誘い水がないと解決できないのだろうか。)祖父父母には気の毒であったが、戦後の農地解放と米

価の支持によって、農村に力がつき、それが二次三次産業の発展を促し、産業構造を逐年変遷せしめてきたことが、今日の経済発展をもたらしたのであろう。

しかし、最近の地価の高騰をみると、都会在住の勤め人は、まさに現代の小作人と言えよう。革命や戦争は、生産手段としての農地と住むべき領土の奪い合いによってもたらされてきたが、今また宅地紛争が起きている。社会経済体制がどうあれ、働かざるもの食うべからずの勤労の精神が失われては、社会の繁栄は望めない。やはり歴史は繰り返すのか。

地道に整理保存された古文書もとにした調査研究から、いろいろな史観が生まれてくるであろう。江戸時代の土地制度や農村経済史の研究は数多くあるが、時代の流れの中で一個の家系がどう揺れ動き生き抜いて今日に至ったのか、文書群に埋もれた家事の記録や日記から、何れは素人なりに繕いてみたいものだ。それには、古文書を判読する力を先ず会得しなくてはと思っている。人が都会に集中して兎小屋に住んでいるのでは、このような代々の資料を保存する場所もなく、また、使い捨ての風潮と共に貴重な文献が消え去っ

てしまう恐れがある。カルチャー教室で源氏物語を読むのもよいが、こうした文書館学の一助に奉仕することは、これからの年配者に向いた生きがいのある所作とならないだろうか。

史料館刊行の目録の解題の中に、わが家の系図をまとめていただいている。語り継がれてきたことと一致しているのに驚いた。それによると小生は十四代に当る。息子に「お前は十五代だ。徳川幕府は十五代迄だった。十六代目を育てろ。」などと説教している。この文書と代々の墓だけを私に残して、父は二年前、郷里の墓所に帰った。墓石は雪に埋もれ倒れ春になると引き起こされいたみが早い。遠い先祖の墓標は半分になつており、また、先祖より大きい墓を設けたいしきたりで、末代は次第に小さくなっている。父の墓からは、これ以上小さくしないことに決めた。

伝来の古文書に接してしみじみと思った。人間至るところ青山ありと言うが、何れの日か、裏山を削って、先祖の後陣に加わるのが、私にとつての定めであり、また、安らぎとなるのであろう。

# 商家経営における収集情報の記録化

——信州松代伊勢町八田家文書目録(その二)を作成して——

安 澤 秀 一

松代伊勢町八田家文書の整理と目録作成についての、基本的な方針と具体的な手法については、目録その一を刊行した大藤修氏が、すでに目録その一の解題、あるいは史料館研究紀要十七に発表した「近世文書の整理と目録編成の理論と技法」(『史料保存と文書館学』吉川弘文館刊に収録)において詳細に論じており、私も目録その二の解題において、大藤氏の方法を踏襲したことを述べ、若干の付言を加えた。従ってここでは史料紹介を行なうにとどめたい。

松代藩において、はじめ給人格御勝手御用役、のち産物御用掛、産物会所取締役などの公用を勤めた八田家は、もともと商家の営業部門として酒造方、呉服店、油店、醬油店、質店、陶器店、そして金融業務など、多様な業種を展開させていた。

こうした八田家の経営行動が松代町ないし松代藩領という狭い市場環境だけで遂行されるものでないことは多言を要しない。その経営行動に

必要な経営内部管理記録の整備を行なっていたことは、たとえば勘定帳簿体系のありように具現化されている。そのみならず、広く経済および経営にかかわる外部環境の情報と知識の収集に務めていた。収集した情報と知識を役立たせるためには、頭のなかの記憶だけに依存するよりも文字記録化されていることのほうが望ましい。史料整理の途中で気のついたその例を一、二、紹介しよう。

史料番号八八〇は、美濃判厚手の用紙一枚である。これを横折上開きで使用するように、折目が付いている。右端一五mmのところへへらで引いた筋目が縦に通じ、その線に平行して一八mm間隔ないし二九mmという幅広の筋目が縦に引かれている。上段に二三行、下段に二四行ある。また横折右端筋目そばに綴じ穴が三つあけられている。美濃判横折帳面に記入する際に下敷きとして使われた用具と考えられる。

横折中央折目から両側にそれぞれ平行して三六mmの所に横筋目がひか

れており、それぞれの行の下に費目書かれている。その上は空白のままであり、費目に従って必要な事柄が記入できるようになっている。

第一行目の書き込みは次の通り

小二七日 二月 一日前 十二月  
大二九日 十月 十一月  
小二三日 諸相場無失念

字数の関係で二行になっているが、第一行目は上から隙間無く書かれている。なお二十二日・二十三日の所は貼紙による訂正である。

二行目以降の項目を列挙して見る。  
御為替、延為替、御屋敷賃、質物賃、家代銀、古銀方、要銀積、外預、別預、(四行空き)、新別預(幅広)、京店(幅広)、同薩州方、江戸店(幅広)、同薩州方、家方、新田、石井、吹田(ここまで上段)、

杉(原力)、野(口力)、秋田、中井幸、石田、福田、岸本、中井、石嶋、角田、西村、竹内、井口、岡田、石井久、筑後方、今治方、雑用方、当町、加入方、富嶋式、貸方、(今力)治銅座当座取替、(同力)所当座賃、(ここまで下段)

以上の四十二項目である。項目の文言から見て、八田家の帳簿記入にそのまま使用されたとは思えない。ただ書かれた時期を享保前後ぐらい

に想定出来るので伊勢町八田家創業の際の必要情報についての参考資料として入手したものであろうか。

つぎの史料も参考資料と思われる写しであるが、大事と考えた箇所に朱で傍線を引いているのが面白い。

史料番号八一四は、美濃判横折、五丁(墨付き三丁)、平紙縫綴し、表題は、仮に(奉公人召し抱之節、給金小遣、望性積立、仕着等、其外勤方行儀定、写留)と名付けた。

この史料にも京本家、江戸店、当地店などの文言があるので、前掲の史料と関係が深そうである。ともあれ全文を紹介するには長すぎるので、要点を紹介するにとどめる。

雇用されて十二年目に京都主人に目見すると、手代格となり、年給三両、以後一年金二分の割で昇給する。十年たつて支配人になると役料祝儀ともて年給金四十両になる。また雇用されると「望性」と称する祝儀が積立てられ、十年目には銀百五十匁となり、以後年々二十五匁と年一割五分の利息を加えるなどの規定が見られる。三井家規定に類似する部分もあるが、他家の規定のようである。経営情報が流通拡散していく事例といえよう。

# 真田家文書目録(その五)の整理を終えて

原 島 陽 一

今年三月付で発行する所蔵史料目録で「真田家文書目録」は五冊目となり、あと二・三冊で全部が完了する予定である。ようやく半分をこえたことになるが、一九七三(昭和四八)年に目録化の具体的な日程を構想した時にはこんなはずではなかった。文書の整理体制について一つの教訓を得た思いである。

史料目録の作成を一人するのがよいが、多人数で処理する方がよいかは一言で断定できないが、真田家文書のように三万点を超す大量史料の場合に複数の人間が分担する方法は決して間違いとは思わない。しかし、真田家文書の目録作業では予測できない事情が重なって、好ましくない結果になった。真田家文書の整理にかかわった人数としては、受入直後の第一次整理(昭和26・30ころ)に従事した約十人を別にして、印刷目録刊行を前提に再開してからは、鎌田永吉・井上勝生・大野瑞男・笠谷和比古そして筆者の五人が担当しこのほかに補佐員の木口信子・相京真澄・広瀬陸の三人が随時参加して

不幸な事態であるとともに、整理体制の維持・確立のむづかしさを改めて痛感させられた。

いる。問題は、これらの者が一斉に共同して分担したのでなく、順次に集散したことにある。真に共同して作業したのは、再開後に鎌田・井上両氏と筆者との三人で取り組んだ時期だけといってもよい。そして現在は、筆者と広瀬さんだけが残り、筆者も三月末をもって停年で退職する。最終巻が出るまでに、あと何人の手が加わるかは予想できないが、印刷目録にして二・三冊分の残余の史料は、従来の経験や知識をもたない人の手に託されることになる。その労苦を思うと、完結することができずに職場を去ることに若干の責任を感じざるを得ない。その一方で、分冊形式では利用に不便だから全史料の整理が終了した後に一挙に印刷すべきだといって、もしもこれまでの整理作業がカードのままで残されていたとしたら、これまたその処理に苦慮することは明白なので、多少は不揃いでも印刷しておいてよかったと思う。いずれにしても、大量の文書を印刷目録にする場合の問題点と弊害とがやや集中的に顕在化したのは

ところで、真田家文書の特色が財政関係の細密な史料を多量に残存している点にあることは、前から何度も指摘してきたが、今回の収録史料の中心はその「財政」の項目に該当する史料である。それらの史料の多くは、勘定方の各役を差出人または宛名人としている。「その一」に収録した冊子型史料の場合は、各帳簿を作成または受理した役職ごとにまとめて目録を編成したのであるが、今回の書付型史料では「その一」のように明確に区分することができなかった。冊子型の表紙には部局名を明記してある史料が珍しくなかったが、書付型史料では評議書類などを除けば皆無に近い。また、長期にわたる関連証文を合綴してある場合には、個人名を役職によりみかえていくと役職名の一致しない例が出るなど「その一」と同じ基準による目録編成はできなかった。やむを得ず、部分的に主題項目を流用せざるを得なかったが、同じ「内借証文」であっても取扱う役職の違うものについては混同しないように、当然ながら、いわゆる出所原則による区分に配慮した

つもりである。

次に、今回の目録では史料の形態をタテの寸法をミリメートル単位で表示する新しい試みを実行した。当館の目録は、書付型史料の形態を原則として表示しなかったが、史料の形態論的研究を促進するためにも放置しておくわけにいかず、最も簡便な方法として料紙のタテ寸法を計測してみた。実行した結果、目録の解題に述べたように、今後解決しなければならぬ点にも気づいた。だからといって後退させずに、改善を重ねて利用者から歓迎される形態表示を志したいと思う。分冊目録の途中で表現様式を変更することの無謀さを指摘されたら謝るほかはないが、史料目録を少しでも向上させたい意欲に免じてお許しを願うものである。今回の目録が書付型史料だけを対象とし、従来の当館の目録様式だと、形態欄はすべて空白になってしまふことを「その三」で経験していたので、何とか克服しよう、と、提唱にどうもまず敗れて実践した次第である。最後に、真田家文書目録の最終分冊が刊行される日の遠からざること

を心から祈念したい。

# 史料所在 調査報告

信濃国  
軽井沢宿

## 本陣・問屋 佐藤家文書

(現、長野県北佐久郡軽井沢町)

平成二年一月二九日から二月一日までの四日間で佐藤芳寿氏所蔵文書の調査を実施した。

調査委員には信州大学歴史研究会の大橋昌人氏をはじめ山崎哲人・市川包雄・小須田基弘・上原一雄の諸氏、信州農村開発史研究所(五郎兵衛記念館内)の斎藤洋一氏、それに上田市在住の井出千代美氏等七名の方を委嘱し、ご協力を得た。

当館からは森安彦・渡辺尚志・林宏保が参加した。なお調査にあたっては佐藤芳寿氏ならびに佐藤邦明氏からも種々お世話になった。

さて、今回調査した佐藤家文書は中山道軽井沢宿の本陣・問屋を勤めた佐藤市右衛門(代々の通称)家に襲藏されたものであり、大小二箇の木箱に収められ、総点数七四九点あり、それを目録点数四一四点に編成した(一括されてある同一種類の文書は一点とし、その内訳は枝番で整理するようにした)。

一昨年度のマイクロフィルムによる史料収集では、軽井沢宿名主で脇本陣を勤めた亀屋佐藤家文書(万平

ホテル・佐藤邦明氏を対象としたが、今回はそれとの関連で、本陣・問屋の佐藤家文書を調査し、文書目録を作成したのである。

佐藤家文書目録の作成にあたっては、一から四一四までの通し番号を付し、基本的には一から八二までは冊子文書、八三から四一四までは書状文書に区分し、冊子文書・書付文書の内部の文書配列は、それぞれ編年順とした。

佐藤家文書の概要について簡単に紹介すると次のとおりである。

文書の形態からみると、冊子文書は八二点、書状文書は三九二点で八〇%が書状形態のものである。

文書の内容は、佐藤家の私的なものと、本陣・問屋役に関する公的なものとに分類できるが、明治期以降のものは一部を除いては私的なものを中心となる。

文書の年代的傾向をみると、戦国期の文書が一点、近世前期(寛永・元禄期)が三八点、近世中後期(正徳・文政期)が六一点、幕末維新时期(天保・明治一〇年)が一四六点、明

治一〇年代以降が九〇点余、年末詳文書が七〇点余である。これからみても、半数以上が天保期以降のものであるが、戦国期や近世前期のものも比較的多くあって存在しており注目される。

さて、これらの文書のうち、目ばしいものを若干とりあげてみよう。

戦国期文書の中で一番古いものは天文五年(一五三六)の村上義清の「軍役」動員に関するものであり、永禄五年(一五六二)の武田信玄、天正四年(一五七六)の武田勝頼発給文書、同一年(一五八三)の北条氏印判状等がある。慶長一五年(一六二〇)には、佐藤織部が仙石秀久から一五〇貫文を、明暦三年(一六五七)には佐藤平八郎が青山因幡から一〇〇石の知行を与えられ、その「知行宛行状」が存在している。

近世前期には、寛永三年(一六二六)から慶安二年(一六四九)にわたり問屋役をめぐって市右衛門家と六兵衛家との間に紛争が発生し、その関係の訴訟文書が六点ほどある。

万治三年(一六六〇)には市右衛門(平八郎と同一人物)の長文の「遺言状」とそれにもとづく「財産分与目録」があり、その内容は「家」や「同族」「家族」意識を窺う上で興味

深いものである。

近世中後期では、延享三年(一七四六)の「軽井沢宿助郷帳」、文化七年(一八一〇)の「御伝馬定書」等がある。

幕末維新时期では、文久元年(一八六二)の皇女和宮の下向に関する宿泊記録や慶応元年(一八六五)の徳川家康没後の二五〇回忌の法会が日光で営まれ、それに関する「継立人馬日帳」「諸書上帳」等が多数残されている。

明治一一年(一八七八)の明治天皇の北陸・東海巡幸の折、軽井沢宿に「行在所」が新築され、それに関する一件書類が一括して保存されている。

さて、佐藤家は明治期に入り本陣・問屋の廃止にともない、明治六年(一八七三)副区長、同七年戸長となり、同八年から本陣敷地内に軽井沢郵便局を開設し扱役等に任命されたりするが、明治三四年(一九〇二)から洋式の「軽井沢ホテル」を開業し、昭和一三年(一九三八)の廃業まで外国人や文人等に愛用された。

佐藤芳寿氏は、これらの自家文書を中心に、『先祖を想う 軽井沢宿本陣 佐藤家の歴史』(昭和五四年発行、続編『平成元年発行』)を自費出版されており、本文書を理解する上に参考となるので付言しておきたい。

(森 安彦)

史料所在  
調査報告

出羽国  
秋田郡 久保田町那波家文書

(現、秋田県秋田市)

一九八九年八月二日～二四日の三日間、那波三郎右衛門・祐格氏(秋田市大町三丁目二一五)旧蔵、現在は秋田市立中央図書館明徳館(秋田市千秋明徳町四一四、電)〇一八八―三二一九二二〇)に寄贈されている那波家文書について、本年度の史料所在調査を実施した。調査にあたっては秋田大学教育学部助教教授(現、高知大学教育学部助教教授)萩 慎一郎氏に周旋の勞をとっていただき、同氏の他に秋田県立博物館学芸主事渡辺紘一氏、東北大学教養部助教平川 新氏、秋田工業高等専門学校講師脇野 博氏に調査員を委嘱し、また明徳館の方々にも御協力いただいた。当館よりは安藤正人、大藤 修の兩名が参加した。

時あたかも八月二日は、全国高校野球選手権大会決勝戦が行われ、宮城県代表仙台育英高校が深紅の大優勝旗を東北に初めてもたらすかと、東北中の人々がテレビに釘付けになっていた。だが、調査員の方々は、熱き思いを胸にしまい、脇目もふらず(ラジオは聴いていたが)文書の整理に没頭され、健闘空しく育英高校が敗れ去った虚脱感にもめげず、最後まで仕事に専心された。また、明徳館の方々には調査中何かと御高配たまわり、那波三郎右衛門・祐格氏からは那波家の来歴および文書について貴重な御教示をたまわった。ここに改めて、各位に対し深甚の謝意を表したい。

那波家は播州赤穂郡那波ノ浦に発し、当主は代々三郎右衛門を襲名している。那波の苗字は地名にちなんだものである。もともとは赤松氏の系統を引く武士であったと伝えられるが、祐恵(天文元年～慶長元年)の代に右の地に移り住み、商人となった。その後、三代宗恩(元和元～天和三年)の時に京都へ進出した。伝承によれば、京都時代、秋田藩の御用達を勤め、多額の金を融通していたようである。宝永五年に京都大火で破産したあと秋田へ移ったのは、その縁を頼ったことであつたという。この時の当主は五代目祐祥(天和二年～延享四年)で、彼が秋田における初代となつた。御当主祐格氏の談によれば、秋田移住前の文書は京都大火で焼失したが、家の来歴等については祐祥が記録して遺しているとのことである。なお、『町人考見録』に出てくる那波家は、二代三郎右衛門・友悦の兄九郎左衛門が創設した家で、この家の文書は京都市所在の洛東遺芳館に現在所蔵されており、史料館でもマイクロ・フィルムに収録して閲覧に供している。

秋田に移った那波三郎右衛門家の方は、秋田藩の御用達を勤め、代々の当主は種々の役職に就いている。近世においては那波家独自の商業は営んでおらず、明治に入り酒造業、大正期に呉服業を創業した。御当主の話では、明治維新の際、佐竹家より藩の御用にかかわる文書の保管を依頼され、那波家ではこれを家政関係の文書とは別個の土蔵に保管してきたとのことである。そして、昭和五九年に、藩の御用関係の文書は秋田市の公共財産として役立ててもらいたいとの御意向で、秋田市立中央図書館明徳館に寄贈された。総点数は帳簿類、書付類合わせて八万五千点にものぼる。年代的には明和五年より明治九年にわたる。

図書館では受入後、当初年代順に配列されたが、現在は同一の御用に

かかわる文書ごとにまとめ直されている。調査では、図書館の棚に配列されている順で目録に採ることにした。今回目録化したのは約千二百点で、御燈油御用、胡麻油絞御用、御蠟絞御用、酒造方御用、室箒方御用、酒造御試方御用を那波家の当主が勤めていた際に、作成ないし受理したものである。

油関係の文書は安永三年より寛政七年にわたって残っており、御燈油御用にかかわるものが中心をなす。これは、久保田城各部屋の燈火用油と約一九箇所の御番所の常夜灯および臨時警衛のための燈火用油、燈芯を配達する役務である。酒関係の文書は明和六年より文化七年にわたる。明和六年、秋田藩は酒造方を設け、那波、中野屋、升屋を支配役に任じて、郡方を通さず領内酒造高の調査と酒役銀の徴収を行わせた。天明二年には室箒方直役を兼務させて、領内の室(糶室)と常(酒の小売業者)の調査と役銀取立に当たらせている。酒造方と室箒方の日記および役銀取立帳がそろっており、領内の酒造業の状況を全体的に把握できる。文化四年には那波祐生が酒造御試方支配人となり醸造試験を行ったが、失敗に帰している。

(大藤 修)



## 平成元年度 新収史料紹介

⑤はマイクロフィルムによる収集を示す。

### 受贈史料

越後国頸城郡行野村横尾家文書  
同国同郡長走村光林寺旧蔵仏典

本史料群二種は、池田淳氏より一括して御寄贈頂いた史料群である。池田氏は新潟県東頸城郡安塚町居住の折に近隣の人から入手され、以来家蔵とされてきたが、奈良市に居を移されたのを機として、この史料の公開を配慮され、当史料館に寄贈の措置をとられたものである。

史料館には、すでに昭和三六年に受入れた横尾家文書（文書記号36A）があり、関連ありということでも、所蔵史料に加えることとした。現物受領後に調査した結果、異なる出所の文書群二つのあることが判明し、横尾家文書59Aと光林寺旧蔵仏典59Bとに分けたのである。

横尾家は明治以前、越後国頸城郡行野村（現地名新潟県東頸城郡安塚町）に居住した村役人・地主という家であった。36Aは近世庄屋文書と地主経営文書に大別できる三二冊五〇通七綴一枚という分量である。なお同じ頃、明治大学刑事事博物館も

約五〇点の横尾家文書を手入しており、昭和四五年刊行の所蔵目録三六号に収録されている。参照されたい。

横尾家文書59A二六一冊五通は、慶応四年の勘定帳を例外として、明治七年から昭和九年までの地主経営文書である。年中日記（明治四二年・昭和九年金銭出納帳、但し大正五・一一年欠）や小作取立帳（明治末・昭和初年）が主であり、高田市所（邸宅の出納帳（大正年間）もある。小作地の所在は居村・和田・大原・小黒・切越地・本郷・樽田・石橋・船倉（以上は現安塚町）・中猪子田（現蒲川原村）である。

光林寺旧蔵仏典59B二五八冊は手澤本七九冊、木版本一二四冊、字典他三四冊、漢籍二一冊からなる。光林寺の所在地長走村は、現在の蒲川原村に包含されている。光林寺は寺院総覧によれば、浄土真宗大谷派である。山号は国祥山、時として霊水台ともいう。

手澤本は經典注釈の講義を筆記したものが多く、京都を初め、諸方に旅しているように思える。筆記者の

名前や年齢が明記されているので、代々の住職が特定できる。

木版本は寛永版三教指帰上・下を初め、江戸時代の木版本をよく揃えており、また書込みのあるものも多く、勉強に励んでいたことがわかる。字典では、享保二十年刊行の増続大広益会玉篇大全の揃いとか、寛文十一年刊行の四声音韻字彙の揃いとかがある。

漢籍は、四書五経の類をあつめている。その一つ、書経（史料番号247）に、新潟県下第十一大区小七区七番組長走村佐々木秀慶持の署名があるので、幕末・明治初期における光林寺住職が、佐々木姓であったことがわかる。

本史料を利用して論文などを執筆された時には、史料館にはもとよりであるが、寄贈者の御好意に応ずるため、下記の住所に抜刷一部を贈呈して頂きたい。

奈良市法蓮町四百十七ー一  
ルネ新大宮207号  
池田 淳 様

（安澤秀一記）

### 受贈史料

陸奥国白河郡 踏瀬村 筋内家文書

このたび、陸奥国白河郡踏瀬（ふませ）村筋内（やない）家文書が、元駒沢大学教授筋内健次氏より当館に寄贈された。

踏瀬村は踏瀬宿とも称した奥州道中の宿駅であった。支配は、はじめ会津領、寛永四年白河藩領、寛保元年越後高田藩領、文政三年以降幕領であった。村高は「天保郷帳」、「旧高旧領取調帳」とともに六九五石余、弘化五年には家数三三軒、人数一五三人であった。宿駅として二〇人、二〇匹の人馬を常備し、上りは根田宿または白河宿へ、下りは矢吹宿への宿継を行った。

筋内家は、由緒書によれば、もと白河城主結城氏の家臣であったが、天正一八年結城氏が豊臣秀吉に滅ぼされるに及んで、踏瀬村に居住し、帰農したという。寛永一二年踏瀬村検断、慶安四年以降は検断、庄屋の両役を兼帯し、また宿の間屋をも勤めた。さらに、安政四年以降駒付役（当歳馬の改めなどを行う）に任じられて幕末に及んだ。明治期には戸長などを勤めた。代々名左衛門を襲



名している。

箭内家文書は、冊一八四三件、狀一七五四件、綴二四二件、計三八三九件（この件数は概算であり、正確な件数、点数は目録作成の過程において確定したいと考えている。またこの他に近代以降の雑誌類が多数ある）からなる文書群であり、最も古いものとしては慶安二年七月の「松平式部様御領分村高帳」があるが、全体として一七、一八世紀の史料は少なく、一九世紀（近世後期）明治一〇年代）の史料が大部分である。内容としては、第一に箭内家が検断及び庄屋として関わった踏瀬村関係の史料群（御用留、年貢割付状、年貢皆済目録、その他年貢諸役勘定帳簿類など）があり、第二に同家が問屋として関わった踏瀬宿関係の史料群（往還御用留、日々帳、また人馬継立や助郷をめぐる願書、議定書類、人馬賃銭の勘定帳類など）がある。なお、村と宿との機能面における相互関係の具体相の解明は今後の課題である。そして、第三に、箭内家の経営、生活に関する史料群（同家は天保期以降酒造業を営んでおりそれに関する諸史料や、借用証文類、金銭出入帳、祝儀や香奠の受納帳など）がある。

箭内家文書の中心部分は、箭内健次氏を中心とする方々の手で既に整理が行われ、『泉崎村史文書目録第三集』（泉崎村教育委員会、一九七七年）として目録が刊行されている。また、同文書は、当館における目録作成作業のため、平成二年度は閲覧サービスを行わないので、その旨御了承願います。（渡邊尚志記）

#### ⑤ 美作国 松平家文書（愛山文庫） 津山

昭和六一年度に引つづき特別研究「近世史料の古文書学的研究」により、美作国津山藩々政史料のうち、宝暦四年（明和九年（安永改元）の町奉行御用日記一二冊、享保一年（明和元年）の国元日記五四冊を収録した。なお津山松平家に関する概要および既収録史料の内容については、本誌46号を参照されたい。複写のご許可を頂いた津山郷土博物館に深甚の謝意を申し上げる。

（現蔵者）津山郷土博物館、岡山県津山市山下九二、収録点数二〇リール、一一、八五一コマ）

#### ⑥ 肥後国天草郡 木山家文書 本戸組大庄屋

寛永以降ごく一時期を除き江戸幕府の天領であった天草は、十組の組合村に分かれ十人の大庄屋に管轄されていた。木山家はそううち現在の本渡市を中心とする本戸組の大庄屋を代々勤めた家で、大量の大庄屋文書を残している（詳しくは『史料館報』第三六号を見られたい）。

今回は一九八一年から行なっている同家文書撮影作業の五回目で、前回に引き続き近世近代の書簡類を収集した。これまで同様、地元の研究者が作成した『旧本戸組大庄屋役木山家古文書目録（稿）』にしたがい整理番号順に順次撮影した。

書簡類とは言っても、代官所役人や会所詰大庄屋からの用状、他組大庄屋や各村庄屋とのやりとりなどが多く、これらは明らかに大庄屋の公用文書群の一部をなすものである。

書簡類は数十通を残しほぼ撮影を終了したが、まだほかに未撮影の史料があり、来年度に第六次の収集を予定している。（現蔵者）本渡市浜崎町一 一五 木山惟彦氏。収録数六リール、三二四九コマ）

#### ⑦ 伊豆国 韭山川家文書 田方郡

前年度に引きつづき、伊豆韭山の世襲代官江川太郎左衛門家に襲蔵された文書記録類の一部分を収録した。（既収録分については本誌第50号参照）

今年度は徳川氏直轄領農村の支配を直接担当した代官の在り方を窺う上で重要な史料として、代官所の上級機関（勘定所）に対する経伺文書を中心収録した。すなわち韭山代官所管下の国郡域は時々増減して一定しないが、概ね伊豆・駿河・相模・武蔵にわたる宿村々の私領上知村の初年取計伺・御料並伺をはじめ、地方に関する年貢・小物成・冥加永・新開起返地の石盛、田租・置租、用水・川除普請、夫食代・拝借金等の取計方・入用立方・被下方・御勘定組伺、また欠落・変死人・張訴・火付・盗賊・隠し売女等々、民事・刑事に関する取計方・吟味伺等であり、それは所管下の街道並木の損木一本、欠落百姓の跡株の処置といった一見些細と思われるような案件にも勘定所の決裁を要するといった封建官僚制の実態を知ることができる。他に文政期の「富士川通附洲新開御用留」、

豆州君沢郡下村々の天正・文禄検地帳の天保 弘化期の写本等のほか、幕末の軍事改革を推進し、砲術家として著名な担庵の代の天保一四年「砲術御門人束修請私帳」等も含まれる。なお当館での写真閲覧は江川

文庫の許可を要するので、事前にご連絡頂きたい。

(現蔵者) 江川文庫、静岡県田方郡韭山町韭山、(電) 〇五五九四一九一〇〇二、収録点数六リール、三八七コマ)

## 受贈図書 昭和六十三年(三)

(秋田県) 比内町史資料編 第二集 御龜鑑 第一巻 江府(二) (秋田県立秋田図書館)

(山形県) 八幡町史 上・下巻 鶴岡市史資料編 荘内史料集 16-2

新庄市史編集資料集 第9号 (新庄市教育委員会)

新庄市史編集資料集別冊 新庄における松尾芭蕉(同右)

白河市史 第六巻

(福島県) 田島町史 第2巻 福島県山都町史資料集 第四集 (山都町教育委員会)

(福島県) 滝根町史資料集 第14・15集

(茨城県) 玉造町史資料 第2集 (玉造町教育委員会)

群馬県史 資料編 16 近世8 大田区史(資料編) 諸家文書1

(東京都大田区)

(東京都) 府中市郷土資料集 11 (府中市郷土の森)

青梅市史史料集 第三十七号 (青梅市郷土博物館)

江戸幕府千人同心関係資料調査報告 (東京都教育庁社会教育部文化課)

東京都埋蔵文化財調査報告 第十五集(同右)

福生市文化財総合調査報告書 第20集 (福生市教育委員会)

秦野市史 通史4 現代 座間市史資料叢書 3 (座間市立図書館)

相州三浦郡大田和村浅葉家文書 第一・四集 (横須賀市立図書館)

相州三浦郡東浦賀村(石井三郎兵衛家)文書 第一・四巻(同右)

幕末の農民群像―東海道と江戸湾をめぐって― (横浜開港資料館・横浜開港資料普及協会)

ひょっくりいも 民俗学へのおさそい (秦野市)

富士宮市史 下巻

蓬左文庫所蔵古地図複製 No.14・15

(名古屋) 名古屋市教育委員会

三重県史資料調査報告書 IV

新修大阪市史 第2巻

(大阪) 熊取町史紀要 第二号 中

瑞雲斎関係書簡集 (熊取町教育委員会)

贈従一位池田慶徳公御伝記 三 (鳥取県立博物館)

(広島県) 府中市史 第6・7巻

防府史料 第十一・十九・二十五・二十六・二十八・三十・三十七集 (防府市立防府図書館)

团兵御仕成記(二) (岩国徴古館)

阿南市史 第一巻

徳島県博物館建設記念学術奨励基金運用委員会研究記録

香川県史 第一巻 通史編

福岡県史 近世史料編 梁川藩初期(下)・近代史料編 福岡県地理

全誌(二) (西日本文化協会)

佐賀県史料集成 古文書編 第29巻

(佐賀県立図書館)

鹿児島県史料 旧記雑録拾遺諸代系譜 I (鹿児島県歴史資料センター)

黎明館

## 平成元年度 (一)

北海道立文書館史料集 第四

新室蘭市史 第五巻

新室蘭市史 第五巻 史料編 1・2

(青森県) 浪岡町史資料編 第十九集

青森県議会史 自昭和50年 至昭和53年

東北歴史資料館資料集 20・23・24

(秋田県) 比内町史資料編 第三集

寒河江市史編集叢書 第26・29集

(寒河江市教育委員会)

土生田桶遺跡発掘調査報告書 (村山市教育委員会)

会津藩家世実紀 第15巻

茨城県史料 近世思想編 大日本史

編纂記録 (茨城県立歴史館)

茨城県史料 幕末編 II (同右)

群馬県史 通史編 8

(埼玉県) 寄居町史編さん調査報告 第13集 (寄居町教育委員会)

房総半島の漁撈用具 第二集 (千葉県立安房博物館)

調布市史研究資料 IX

越後・佐渡関係の古札図録 (土田正雄・土田二三江)

長野県史 近代史料編 第五巻(二)

(静岡県) 細江町史 通史編上

名古屋叢書 三編 第一・五・七巻

〔名古屋市蓬左文庫〕

刈谷町庄屋留帳索引〔刈谷市教育委員会〕

碧海郡野田村の日露戦争 第二・三集〔野田史料館資料刊行会〕

愛知県公報100年の歩み〔愛知県公文書館〕

藤井寺市史 第八巻

門真市史 第一巻

〔纂所〕

大阪市史史料 第25巻〔大阪市史編纂所〕

大谷女子大学資料館報告書 第18・20冊

藤井寺市文化財 第10冊

〔和歌山県〕貴志川町史 第一巻

小野田市史 史料下

徳島県漁村関係史料〔二〕〔由岐町教育委員会〕

香川県史 第二・四・七巻

福岡県史 近代史料編 農民運動

〔二〕〔西日本文化協会〕

熊本県本渡市文化財調査報告書 第五巻〔本渡市教育委員会〕

広瀬井手日記 〔二〕〔別府大学付属博物館〕

〔鹿児島県〕龍郷町誌 歴史編・民俗編

沖縄県史料 戦後2〔沖縄県教育委員会〕

鹿野市史資料編 第二十集

平良市史 第八巻〔平良市教育委員会〕

図録「成田山ゆかりの人々」〔成田山霊光館〕

網走支庁管内戦前農業関連資料、西本善治郎氏旧蔵農業関連資料展示

目録〔網走市立図書館〕

おかげまいり〔兵庫県立歴史博物館〕

古神宝 神々にささげた工芸の美

〔奈良国立博物館〕

遠野市立とおの昔話村・遠野市立博物館

国際日本文学研究会集議録〔第12回〕〔国文学研究資料館〕

佛光寺御日記 第三巻〔本山仏光寺〕

蘇った逢なる邪馬壹国〔土佐上古代史研究所〕

室町幕府関係引付史料の研究〔東京大学史料編纂所〕

角田忠行翁小傳〔熱田神宮々庁〕

中央大学史料集 第二・三集

世界の中の日本I〔国際日本文化研究センター〕

新収日本地震史料 補遺・〔同〕別巻〔東京大学地震研究所〕

石炭研究資料叢書 No.10〔九州大学石炭研究資料センター〕

新札幌市史 第一巻〔札幌市教育委員会〕

青森県立郷土館調査報告第24・25集

鹿野市史資料編 第二十集

能代市史資料 第19号〔能代市教育委員会〕

昭和63年度秋田城発掘調査概報〔秋田市教育委員会〕

秋田市遺跡詳細分布調査報告書〔同右〕

山形県史 別編Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ

東根市史 別巻上

寒河江市史編纂叢書 第13・38集

山形市史資料 第75号

米沢市史〔編集〕資料 第23号

新庄市史編集資料集 第13号

〔福島県〕岩代町史 第1巻

福島県山都町史資料集 第五集

大穂町史〔つくば市大穂地区教育事務所〕

大穂の文化財〔写真集〕〔同右〕

新編埼玉県史 通史編6

草加市史 資料編Ⅱ

明治43年水害調査報告書〔草加市草加市史調査報告書 第四集

〔埼玉県〕寄居町の歴史

与野市史 通史編 下巻

船橋市市内遺跡群発掘調査報告書

〔船橋市教育委員会〕

大田区史資料編 諸家文書2

大田区の埋蔵文化財 第九集

都市紀要 三十三〔東京都〕

東京市史稿 市街編 第八十・産業篇 第三十三〔同右〕

〔八王子市教育委員会〕

八王子千人同心関係史料集 第二集

〔同右〕

世田谷区史料叢書 第四巻〔世田谷区立郷土資料館〕

世田谷区教育史 資料編二〔世田谷区教育委員会〕

古道シリーズ 4〔同右〕

世田谷区立郷土資料館史跡ガイド 第一集〔同右〕

江戸川区の文化財 第六集〔江戸川区教育委員会〕

江戸川区文化財調査報告書 第三集

〔同右〕

江戸川ブックレット No.5〔同右〕

港区指定文化財 昭和63年度〔東京都港区教育委員会〕

港区指定文化財 昭和54年度・昭和63年度〔同右〕

港区の職人〔同右〕

須原家文書 7〔江戸川区教育委員会〕

龍津寺東遺跡 1〔沼島市教育委員会〕

民権ブックス 2〔町田市立自由民権資料館〕

藤沢山日鑑 第七巻〔藤沢市文書館〕

新潟県史 別編1・2

加賀辰巳用水東岩隧道とその周辺

〔加賀辰巳用水東岩周辺調査団〕

福井市史資料編 2・別巻 絵図・地図

敦賀市議会史 第三卷

地方史のとびらを開く〔金井圓〕

岐阜大学教育学部 郷土資料 (19)

静岡県史 資料編 4・5・14・16・23

田原藩日記 第三・四卷 (愛知県)

田原町教育委員会

近江史料シリーズ (6)〔滋賀県立図書館〕

宇治市埋蔵文化財発掘調査概報 第12集〔宇治市教育委員会〕

市民考古学講座 第1講〜第3講

〔宇治市教育委員会〕

加古川市史 第一巻

明石市史資料 (明治前期篇) 第七集下

忠臣蔵 第一巻 (赤穂市)

呉の歩み

牛島漁業研究 (2)〔光市立牛島小学校〕

福岡県史 近世史料編 福岡藩御用帳 (一)〔西日本文化協会〕

大分県史 地誌篇・先史篇

中津藩歴史と風土 第九輯 (中津市立小幡記念図書館)

えびの市埋蔵文化財調査報告書 第四集 (えびの市教育委員会)

宮崎県文化財調査報告書 第32集

〔宮崎県教育委員会〕

昭和63年度農業基盤整備事業に伴う遺跡調査概要報告書〔同右〕

西ノ原遺跡 (同右)

国衙・郡衙・古寺等遺跡詳細分布調査概要報告書 I (同右)

串間市文化財調査報告書 第二集

〔串間市教育委員会〕

奄美史料 (19)〔鹿児島県立図書館奄美分館〕

徳島県立文書館設立運動の歩み〔文書館設立推進協議会〕

貝塚の歴史と文化〔貝塚市教育委員会〕

大正デモクラシーと政党政治特別展展示目録〔憲政記念館〕

小さなものへの愛情〔静岡市立登呂博物館〕

六世紀の村〔小山市立博物館〕

祈りの造形 下野の仏像〔栃木県立博物館〕

写真が語る東京湾 消えた干潟とその事業〔大田区立郷土博物館〕

海を渡った武士団〔北海道開拓記念館〕

第12回国際文化財保存科学会議〔第12回国際文化財保存科学大議事務局〕

CONSERVATION OF ART EASTERN ART (IIC KYOTO CONGRESSES)

図書寮叢刊 九条家歴世記録一〔宮内庁書陵部〕

図書寮叢刊 伏見宮旧蔵叢書集成一〔同右〕

国文学年鑑 昭和62年〔国文学研究資料館〕

国文学研究資料館共同研究報告 5

〔同右〕

熱田神宮文書 千秋家文書中巻〔熱田神宮々々〕

田神宮々々

神宮文庫叢書 III〔神宮文庫〕

川崎大師平間寺 仏教文化論集5

概説古文書学 近世編〔吉川弘文館〕

洋学資料による日本文化史の研究 II〔吉備洋学資料研究会〕

シリーズ―人間とシンボル 1

3〔中川ケミカル〕

神苑 古川左京歌文集〔古川清彦〕

追悼十年 豊田武先生を偲ぶ〔豊田武先生追悼集発起人〕

石井至毅著作集〔世田谷区立郷土資料館〕

三井両替店の御為銀裁許と家屋敷〔賀川隆行〕

上智大学史資料集 第四集

中国における尺度の変化〔岩田重雄〕

近世における質量標準の変化〔同右〕

近世中期における村内質地関係について〔神谷智〕

鯉節 上巻〔日本鯉節協会〕

航空讃歌五十年〔伊藤良平〕

所蔵資料目録〔丸亀市立資料館〕

郷土資料増加目録〔高知県立図書館〕

〔北海道〕利尻町史 史料編

エサンヌップ2遺跡エサンヌップ3

遺跡埋蔵文化財発掘調査概要報告書〔北海道門別町教育委員会〕

津軽近世史料 4〔北方新社〕

盛岡藩雜書 第三巻〔盛岡市教育委員会・盛岡市中央公民館〕

山形県指定有形文化財 石行寺観音堂修理工事報告書〔石行寺〕

石行寺観音堂の落書について〔同右〕

二本松市史 9

〔福島県〕白沢村史 各論編II

〔福島県〕滝根町史 第二巻資料編

福島市史 別巻VII

福島市史資料叢書 第53・54輯

〔福島県〕目で見る桑折町の歴史

〔福島県〕桑折町史 第3・5巻

〔福島県〕桑折町歴史資料所在目録

第1・2・3・5・10・11分冊

〔福島県〕桑折町史料叢書 第3・4集

古河藩幕末史〔中川保雄〕

取手市史 原始古代〔考古〕資料編・近世史料編III〔取手市史教育委員会〕

土浦市史資料 第一集〔土浦市教育委員会〕

土浦市史編纂資料 第三集〔同右〕

近世村落の研究〔門前博之〕

笠懸村誌 別巻〔笠懸村誌編纂室〕

新編埼玉県史 通史編4・資料編9

春日部市史 第二巻

# 彙

# 報

続大宮市史 I

所沢市史 民俗

所沢市史調査資料 別集11

埼玉県議会史 第十三巻

千葉県史料 近代篇 郡制下

千葉市史 史料編7

東京都古文書集 第七巻〔東京都教育庁〕

東京都の近世社寺建築〔同右〕

日野金剛寺〔高幡不動〕文化財調査報告〔同右〕

日野金剛寺〔高幡不動〕文化財調査報告〔同右〕

日野金剛寺〔高幡不動〕文化財調査報告追録〔高幡山金剛寺〕

大田区の文化財 第25集〔大田区教育委員会〕

文化財シリーズ 35〔杉並区教育委員会〕

昭和62年度杉並区の指定登録文化財〔同右〕

滝ヶ谷遺跡 II〔世田谷区教育委員会〕

中野田遺跡〔同右〕

喜多見陣屋遺跡〔同右〕

歴史・文化・世田谷ウォッチング

史跡マップ〔同右〕

世田谷の近代建築 第2輯〔同右〕

松が丘遺跡発掘調査報告書〔中野区教育委員会〕

大和市史 1

厚木市史 中世資料編

川崎市史 資料編2

横浜近代経済史研究〔横浜開港資料館〕

神奈川県民俗調査報告 16・17〔神奈川県立博物館〕

加賀市史料 (九)〔加賀市立図書館〕

福井県史 資料編8

(福井県) 三國町百年史

長野県史 通史編 第六巻

海津旧蹟録〔真田宝物館〕

各務原市資料調査報告書 第三十号〔各務原市教育委員会〕

沼津市歴史民俗資料館資料集 7

足柄城現況遺構調査報告書〔静岡県〕

尾州商人神戸家の江戸屋敷経営〔水野潔〕

宇治市埋蔵文化財発掘調査概報 第13集

向日市埋蔵文化財調査報告書 第25集

大阪府史 第7巻

赤穂塩業史料集 第一巻〔赤穂市教育委員会〕

(兵庫県) 西紀・丹南町文化財調査報告 第7集

和歌山県史 古代史料II

和歌山県史 第二巻

岡山県史 第十二巻

(広島県) 御調町史

広島市の文化財 第40・45集

享保増補 村記〔岩国徴古館〕

今治郷土史 第七巻

阿南市史 史料編〔近世〕

直方市文化財調査報告書 第10集

佐賀県教育史 第一巻

(宮崎県) 都濃町文化財調査報告書 第2集

哺乳動物化石の産状と旧石器文化

(岡山大学文学部)

イコン図録〔玉川学園教育博物館〕

イコン図版解説〔同右〕

明治大学刑事博物館資料 第11集

近世後期における主要物価の動態

(増補改訂)〔三井文庫〕

統計資料シリーズ No.33・34〔一橋大学経済研究所日本経済統計情報センター〕

世界大博物館図鑑 2〔平凡社〕

山本病院―源流とその歩み―

絵馬 民衆の祈り展図録〔足立区立郷土博物館〕

津軽家の名目展図録〔弘前市立博物館〕

尾張のもめん―そのルーツを求めて―〔一宮市博物館〕

美作の歴史と文化〔津山郷土博物館〕

法然と浄土教〔同右〕

バリコミュニケーション諷刺画展展示目録

(神奈川大学図書館)

桃山の華 屏風襖絵〔サントリー美術館〕

びいどろ・ぎやまん・ガラス〔同右〕

(以下次号)

## ○史料の収集

本年度のマイクロフィルムによる史料の収集は、伊豆国田方郡江川家文書、肥後国天草木山家文書、美作国津山松平家文書について実施した(うち松平家文書は特別研究「近世史料の古文書学的研究による」)。また、池田淳氏より越後国頸城郡行野村横尾家文書と越後国頸城郡長走村光林寺旧蔵仏典の寄贈を、箭内健次氏より陸奥国白河郡踏瀬村箭内家文書の寄贈を受けた。各文書の概要については本号「新収史料紹介」を参照されたい。

## ○史料の所在調査

本年度は、出羽国秋田郡久保田町那波家文書、信濃国軽井沢宿本陣・問屋佐藤家文書について実施した。概要については本号「史料所在調査報告」を参照のこと。

## ○史料保存機関事務連絡および調査

次の機関を対象に調査。島根県立図書館(二月一三日・一五日、深川美枝子)、小田原市立図書館(三月三日、林宏保)

## ○評議員会と運営協議委員会の開催

平成元年一月二〇日、同二年二月二日に運営協議委員会が、同三月七日に評議員会がそれぞれ開催され、教官人事、管理運営、次年度事業計画等について協

議ないし評議された。

#### ○定期刊行物の刊行

1 『史料館所蔵史料目録』第五〇集として「信濃国埴科郡松代伊勢町八田家文書目録」(その三)を、同第五一集として「信濃国松代真田家文書目録」(その五)をそれぞれ本年三月に刊行。

2 『史料館報』第五二号(本号)を刊行。次号は本年九月刊行予定。

3 『史料館研究紀要』第二一号を本年三月に刊行。内容は次の通り。  
近世淡路の棒役負担について

高橋 啓

農民的土地所持と村落共同体

渡邊 尚志

「御用留」の性格と内容―武州荏原郡上野毛村「御用留」の検討―

森 安彦

アーキビストの教育と養成をめぐる新しい波―ICA国際シンポジウムの諸報告―

安藤 正人

史料館研究紀要既刊総目次(第一号、第二〇号)

#### ○館内研究会

第一〇八回(平成二年三月一三日)

偽文書と「正文」との間

東京大学教授 石井 進氏

○平成元年度史料管理学研修会修了証書の授与

所定の教科目を履修し、レポート審査

に合格した次の方々に修了証書を授与した。

A 長期研修課程修了者氏名 所属 レポート題名

(1) 斎藤正樹(松戸市立図書館) 松戸市における史・資料の保存

(2) 松本義男(日本工業大学資料室)

『礼羽誌略』考―松本家系譜について

(3) 富善一敏(東京大学大学院) 文化

一〇年信州諏訪郡乙事村における文書整理について

(4) 藤田 純(多摩市役所) 多摩市の文書管理状況について

(5) 吉岡 孝(多摩市役所) 多摩市史編集における史料整理・目録編成の現状と課題

(6) 深川 伸(東京大学生産技術研究所) 研究所資料のマイクロ化 CD-ROM化について

(7) 飯野洋一(東京大学法学部) 選挙行政文書に関する一考察―埼玉県を中心として

(8) 長坂陽子(東洋大学大学院) 埼玉県立文書館における地域対外活動と作成目録の変遷

(9) 都留孝子(東洋大学大学院) 近世史料のデータベース化について

(10) 井上恵美子(東洋大学大学院) 史料の保存について

(11) 渡邊佳子(京都府立総合資料館)

明治期京都府における記録文書保存の状況―京都府庁文書の記録をたどる

(12) 若杉隆志(法政大学大原社会問題研究所) 個人文庫の冊子目録について検討する

B 短期研修課程修了者氏名 所属 レポート題名

(1) 秋田通子(愛媛県吉田町教育委員会) 吉田町に於ける史資料調査と今後の課題

(2) 遠藤トモ(梅花学園資料室) 学校法人梅花学園における学園史資料の収集と今後の課題

(3) 藤川光代(四国女子大学附属図書館) 四国女子大学附属図書館における凌宵文庫目録作成上の問題点

(4) 戸津川温子(北海道立文書館) 北海道における公文書の保存管理と文書館の公文書引渡しについて

(5) 高橋健一(佐倉市役所) 佐倉市歴史資料保存センターへの展望と今後の課題

(6) 本多博之(福岡市博物館) 福岡市博物館における史料管理の現状と課題

(7) 長澤 洋(広島県立文書館) 広島県立文書館における行政文書の収集と閲覧利用について

(8) 金山正子(大阪府公文書館) 大阪府公文書館における公文書の収集・保存・整理と今後の課題

(9) 神田由美(東京大学大学院) 香川県金毘羅宮関係史料について

(10) 末信千代子(九州大学文学部) 部局図書室における保存対策について

(11) 植村芳浩(熊本県立図書館) 近世史料の取り扱いについて

(12) 稲光勇雄(福岡県立図書館) 公共図書館における郷土資料室運営の一考察

(13) 野田恵美(京都大学文学部) 京大国史研究室所蔵史料『国史分類目録』和綴本の実態調査

(14) 峰 日出人(福岡地域史研究所) 史料管理学研修会を受講して―職場における問題点の把握と今後の取り組みについて

(15) 喜田 恵(福岡地域史研究所) 史料管理の実務における「資料群」概念の具体化とその拡張の必要性和問題点

(16) 高橋和広(福岡地域史研究所) 古代史料論について

(17) 森 知巳(香蘭社) 株式会社香蘭社における現存史料の保存と利用について

(18) 保坂裕興(学習院大学史料館) 武蔵国上名栗村町田家の文書管理史―

体系的秩序再構成のための準備ノ一  
トとして―

(19) 尾崎葉子 (有田町歴史民俗資料館)

陶都有田における文書の収集と活用について

(20) 中村久子 (佐賀部落解放研究所)

田尻徳磨家史料について

(21) 本多美穂 (佐賀県教育庁) 佐賀県

立歴史資料館 (仮称) の構想と課題

田 碓 美也子 (佐賀県立図書館) 佐賀

賀県立図書館における歴史資料整理

の現状と課題

## ○平成二年度史料管理学研修会の開催予

定

平成二年度は次の通り実施の予定。追

って募集要項を関係機関に配布する。

A 長期研修課程 前期 七月九日～八月

三日、後期 九月三日～九月二八日 (前

後期とも最後の二週間は研修レポートの

作成に充てる)。募集人員三五名 (半期す

つ二年度にわたって履修することも認め

る)。於、国文学研究資料館。

B 短期研修課程 十一月五日～十一月一

六日 (最後の二週間は研修レポートの作

成に充てる)。募集人員三五名。於、岡山

県青年館 (岡山市)。

なお、研修レポートの作成はそれぞれの

の自宅ないし職場において作成するもの

とする (長期、短期とも)。

○史料館員研究・教育活動一覽 (平成元

年発表のもの。ただし、大学出講は平成  
元年度)

### ① 安澤 秀一

・「文書館と地域の社会的集合記憶」

・「我孫子市史研究」一三三号

・「記録管理学を考える」(「レコード

・マネジメント」一四号)

・「史料保存利用サービスの国際化」

・「日本歴史学協会年報」四号

・「資料 (史料) の収集整理公開とい

うことを説明することの難しさ」

・「情報知識学会ニュースレター」三

号)

・「文字記録史料と電算機応用に関す

る課題と解決・研究集会」について

(同前四号)

・「文字記録史料と電算機応用に関す

る課題と解決・研究集会」を開催し

て」(「全史料協関東支部会報」一八号)

・海外文献紹介「A・K・ウルスバー

レ編著『企業記録の管理』(「レコ

ード・マネジメント」二二号)

・同「A・ベン他共著『記録管理ハン

ドブック』(同前三号)

・史料紹介「上州小頭三郎右衛門文書

(一)」「(「東京部落解放研究」六三

号)

・「史料館所蔵史料目録第四八集 信

濃国埴科郡松代伊勢町八田家文書目

録 (その二)』

・大学出講 早稲田大学大学院経済学  
研究科 日本経済史史料講義

### ② 原島 陽一

・編著『史料館叢書別巻1 明治開化

期の錦絵』(東京大学出版会)

・「断載史料の復原補修」(「史料館研

究紀要」二〇号)

・「国立史料館の近代史料」(「日本近

代思想大系21 月報」岩波書店)

・大学出講 立正大学 日本史特講

### ③ 森 安彦

・監修・共編著『世田谷区教育史』資

料編二 (世田谷区教育委員会)

・監修『世田谷の地名』下 (同前)

・共編著『世田谷区史料叢書』第四卷

(同前)

・共編著『武蔵野市史』資料編五 (武

蔵野市)

・共編著『国立市史』中巻 (国立市)

・監修・共編著『古文書を読む 基礎

コース』(日本放送協会学園)

・「草莽の志士と郷学運動 斎藤寛斎

と太子堂村郷学所」(津田秀夫編『近

世国家と明治維新』三省堂)

・「文政の時代」(林英夫編『古文書の

語る日本史』7、筑摩書房)

・書評「村上直他編『日本近世史研究

事典』」(「週刊読書人」一八〇八号)

・「喜多見藩」(「藩史大辞典」第二巻、

雄山閣出版)。

・報告「歴史学研究と学術情報」(於、  
立正大学、日本歴史学協会学会連絡

会)

・大学出講 一橋大学 古文書

### ④ 浅井 潤子

・共編著『概説古文書学』近世編 (吉

川弘文館)

・「改元考」(「郷土神奈川」二三三

・「平成改元に思う」(「協同セミナー」

九九号)

・講演「近世の土地史料について」

(於、神奈川県立文化資料館主催「か

ながわ県民アカデミー」)

・講演「木曾林業と江戸」(於、目黒区

立守屋教育会館主催「秋の歴史講座」)

・大学出講 神奈川大学経済学部 古

文書講義

### ⑤ 安藤 正人

・共著「The Japan Society of Archives」

(「JANUS」ICA Bulletin)

・「記録遺産の保存と国際協力」(「大

阪市公文書館研究紀要」創刊号)

・「史料館所蔵史料目録第四九集 越

後国頭城郡岩手村佐藤家文書目録

(その二)』

・書評「ウィリアム・ベネドン著『記

録管理システム』」(「図書館雑誌」

八三巻七号)

・「第一一回国際文書館会議と第一回

国際アーキビスト養成コロキウムに



参加して」(『史料館報』五〇号)

・講演「記録文化財の保存」(於、埼玉県立文書館主催「文書史料取扱講習会」)

・講演「公文書館法と地方(公)文書館」(於、神奈川県大和市市史編さん審議会)

・講演「文書館と文書館専門職員―世界の現状―」(於、茨城県市町村史編さん連絡協議会講演会)

・講演「『公文書館法』とわが国文書館の現状について」(於、福島県「地方史研究・市町村史編纂事業と文書館」講習会)

・講演「記録文化財の保存と文書館」(於、小山市立博物館主催「第二回文書保存講演会」)

・報告「史料館問題と史料整理法について」(於、千葉大学「歴史科学と教育」研究会例会)

・報告「Tentative Archival Training Courses in Japan」(於、国際文書館評議会(ICA)主催「第二回アーキビスト養成国際シンポジウム」(ミラノ))

・報告「アーキビスト養成の新しい波―第二回 ICA 国際シンポジウムに参加して―」(於、全国歴史資料保存利用機関連絡協議会関東部会月例研究会)

・報告「神奈川県公文書館(仮称)の専門職員の養成について」(於、神奈川県公文書館担当者会議)

・大学出講 学習院大学博物館学芸員課程 史・資料整理法  
⑥山田 哲好

・「文字記録史料と電算機応用に関する課題と解決」研究集会参加記(『史料館報』五一号)

・講演「史料の整理と管理」(於、栃木県立文書館研修会)

・報告「近世・近代史料所在情報のデータベース化」(於、「文字記録と電算機応用に関する課題と解決」研究集会)

・報告「高島藩宗門帳の復元について」(於、学習院大学史学会例会)

・報告「高島藩宗門帳の復元について」(於、全史料協関東部会月例研究会)

・報告「史料所在情報のデータベース化」(於、地方史研究協議会主催「地方史研究と学術情報」シンポジウム)

・大学出講 立正大学文学部 古文書学実習  
⑦渡邊 尚志

・「近世農民の生業と生活―信濃国諏訪郡瀬沢村坂本家の場合―」(『史料館研究紀要』二〇号)  
・「相給知行と豪農経営―上総国山辺郡台方村前嶋家を事例として―」(『論

集きんせい』一一号)

・「幕末・維新时期における農民と村落共同体」(『歴史評論』四七五号)

・報告「幕末・維新时期における農民と村落共同体」(於、第二八回近世史サマーセミナー全体会)

・大学出講 東洋大学文学部 近世農村史料論、近世村落史研究  
⑧大藤 修

・共著「日本家族史」(梓出版社)

・「記録史料の保存利用に関する日英セミナー」開催の位置と意義(『地方史研究』二一八号)

・史料紹介「農民の旅日記」(『小山町の歴史』三三号、静岡県小山町史編さん室)

・「願入寺」(茨城県地方史研究会編「茨城の史跡は語る」、茨城新聞社)

・講演「文書史料の保存と整理」(於、平成元年度東北大学附属図書館職員総合研修会)

・講演「史料の整理と管理について」(於、茨城県立歴史館主催「平成元年度市町村史料保存関係者研修会」)

・大学出講 東京大学文学部 近世文書論  
○人事異動  
定年退官(平成二年三月三十一日付)  
教授 教 授 原島 陽一  
教授 安澤 秀一

## ◎閲覧業務停止のお知らせ

書庫内燻蒸、蔵書点検の実施にと  
もない、左記の期間の閲覧を停止す  
る予定ですので、お知らせいたしま  
す。  
四月二三日(月)・五月二日(水)

## 史料館報 第五二号

平成二年(一九九〇)三月三十一日

編集兼 国文学研究資料館

発行者 史料館

〒四二一東京都品川区豊町一ノ六ノ一〇

電話〇三(七八五)七一三二(代)

印刷所

東京都台東区寿三ノ一四ノ五

有限会社 スミダ

電話〇三(八四二)七三三三